暮　ら　し

建造物

昭和初期までの民家はほとんどが草葺きの屋根であった。江の川流域では一般的に下流域では麦ワラ屋根が多く、山間地に入ると稲ワラ屋根が増えてくる。カヤぶき屋根は長持ちするが、比較的裕福な家でないとできなかった。間取りについては「田の字形」の4間取りが普通だが、床の間をどういう向きに配置するか、江の川西部と東部で違いが出てくる。床の間を土間に向ける「妻床」は西部の石見地方に多く、前庭に向けた「平床」は江の川東岸から出雲地方に分布している。

江の川流域で国や県の重要文化財に指定されている古民家は上流部の広島県側に多い。まず下流域では石見町日貫の山崎邸（町文化財）が地図に見える。当家に残されていた板図（家の間取り計画を板に描いたもの）に安永8年（1779年）という記録があり、江戸後期に建てられたものとされている。

広島県に入っていくと三次市作木町（旧作木村）に「殿敷（とのしき）」という旧家があり、最近地元自治体に寄付されたと聞く。同じく三次市の風土記の丘には世羅町から移築された真野家住宅や、三良坂町のぞみが丘にやはりダム建設で移築された旛山家住宅というのがある。この二つの古民家はいずれも国の重要文化財となっている。

三次市吉舎町にも国の重要文化財となっている奥家住宅がある。棟札に天明8年（1788年）と書いてあり、建築年代が明確な民家としては、この地方の18世紀を代表とするものとされている。その他三次市三和町の旧佐々木家住宅（県文化財）や安芸高田市甲田町の児玉家（県文化財）などがある。

江の川流域で最も古い民家は最上流の比和町森脇の荒木家住宅と思われる。天正年代（1573～1591年）の建築と伝えられ、もちろん国の重要文化財に指定されている。

庄原市比和町の荒木家住宅

邑南町日貫の山崎家住宅

石垣

三次市の市街地をすぎると江の川は急に両側の山が迫って、V字谷の風景となっていく。ここら一帯は「江の川関門」と呼ばれ、中国山地の脊梁部にあたる所を貫いて流れているため、よりいっそう急峻なイメージを受ける。

江の川は大雨になると、三つの大きな支流から注いだ大量の水が、いったん三次盆地の広々とした所に集まり、今度は急に狭くなった河谷地帯に押し寄せるため、多いときには平常水位から18mも上昇することがある。

川沿には見事な石垣の風景が見られる。急な斜面に家の敷地や田畑など平地を確保するには、石垣は無くてはならないものである。石組みはほとんどが自然石をそのまま組み合わせて積み上げた「野面（のづら）積み」の技法が使われている。所々立派な屋敷があり、見事な切石積みの石垣が見受けられる。また、川沿いに敷設された三江線の石垣は間知石（けんちいし）による谷積み技法が使われている。

野面積みは古墳時代の遺跡にも見られる古くから行われてきた方法で、最も手っ取り早いやり方である。しかし様々な形の石を組み合わせるから、なるべく堅固にしかも見た目に美しくするにはかなりの技術がいる。日本の石工技術はもともと中国大陸から入ったもので、主に大和地方の社寺建築においていくつかの職能集団が形成され、発達していった。そして港の整備や築城にも関わり全国に広がっていったものと思われる。中国地方もその流れの中で様々な石積み技法が入ってきた。そして、尾道石工や山県（やまがた）者など、地方独自の石工集団を生み出していくことになる。タタラも石垣文化形成の大きな要因となっている。谷間の奥まった集落のほとんどがカンナ流しに関係している。タタラ従事者がそういった場所に集落を形成したという話や、たたら流しで使われた沈砂池が田畑に再利用されたという話も多い。

お助けごうろ

江の川水系の１つに美波羅川という川がある。この川に沿って三次方面から三和町に入ってほどもなく、「聖地助磊（せいちたすけごうろ）」という古ぼけた看板が見える。「助磊」は、洪水の際の緊急避難場所として設けられた、いわば昔の防災施設である。幅 4 ㍍四方の石垣の高台で、高さは約 2 m、上は土盛りがしてあり、中央には柿の木が一本植えられている。

「磊」という字は、本来はライと読み、石を３つ合わせて石が重なり合う様、ごろごろと石が多い様を表している。このような地形を昔から「ごうろ」と呼ぶ言い方が江の川流域には見受けられる。説明板には「洪水の時、この助磊に登り柿の 木に身を縛り付けて難を逃れた。」という記述がある。この地域一帯は比較的低地であり、川が湾曲しているため、大変氾濫が起きやすい地形となっている。古の人々が厳しい自然条件の中で生きていくために、智恵をしぼってこのような施設を考え出したと思われる。